伊東から

芥川龍之介

拝啓。小生は、元来新聞の編輯に無経験なるものに御座候(ござさふら)へども文芸上の作品は文芸欄に載(の)るものと心得居(を)り候。然るに四月十三日の時事新報(静岡版)は文芸上の作品を文芸欄以外に掲(かか)げ居り候。それは「けふの自習課題」と申すものに之有(これあり)候。

小学四年。さくらの花はどんなくみたてになつてゐますか？

小学五年。花崗岩(くわかうがん)はどんな鉱物から出来てゐますか？

小学六年。海藻(かいさう)の効用をのべなさい。

これは勿論(もちろん)詩と存じ候。殊に桜の花の「くみたて」

などと申す言葉は稚拙の妙言ふべからず候。何か編輯上の手違ひとは存じ候へども、爾来かかる作品は文芸欄へお収め下され度、切望の至りに堪へず候。右差し出がましき次第ながら御注意までに申し上げ候。頓首。

四月十三日　伊東にて

芥川龍之介

佐佐木茂索様

二伸。小生と同じ宿に十二三歳の少女有之、腎臓病とか申すことにて、蠟のやうな顔色を致し居り候。付き添ひ居り候は母親にや、但し余り似ても居らぬ五十恰好の婦人に御座候。小生、今朝ふと応接室

へ参(まゐ)り候所、この影の薄(うす)き少女、籐(とう)のテエブルの上へのしかかり、熱心に「けふの自習課題」を読み居り候。

定めし少女も小生と同様、桜の花や花崗岩(みかげいし)や潮(しほ)の滴(したた)る海藻を想(おも)ひ居りしことと存じ候。これは決して臆測(おくそく)には無之(これなく)、少女の顔を一瞥(いちべつ)致し候はば、誰にも看取(かんしゆ)出来ることに御座候。小生は勿論「けふの自習課題」の作者に芸術的嫉妬(しつと)を感じ候(さふらふ)。然れども恍惚(くわうこつ)たる少女の顔には言ふ可(べ)からざる幸福を感じ候。御同様文筆に従ひ居り候上は一行(いちぎやう)にてもかかる作品を書き度(たく)、若し又新聞の文芸欄にもかかる作品のみ載(の)ることと相成り候はば、如何(いか)ばかり快(こころよ)からんなどとも存じ候。

早早（さうさう）。

（大正十二年四月）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。